



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | ことばへの信頼について                                                                 |
| Author(s)    | 小泉, 朝未                                                                      |
| Citation     | 臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 15-20                                              |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/79242">https://doi.org/10.18910/79242</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集 1 臨床哲学の今——在学院生・修了生によるエッセイ

## ことばへの信頼について

小泉 朝未

どうしてか、ことばについて、最近ずっと思いをめぐらせている。

ことばと私との関係はこの10年ほどの間にすっかり変化した。ことばとは、一方的にすでにあるもので、もやもやとした感覚の塊である私の一部を型にいれて押し出し、人に差し出すようなものだった。押し出された型から実感を伴う私は抜け落ちて、ことばは軽く、中身のないものでしかなかった。10代の頃、私の周りにはそうしたことばがあふれていたような気がするし、そもそもことばをそれほど真剣に聞くこともなかった。ことばにできていないと怒る人がいる場面では、型を押し出すスピードに集中して声を上ずらせながら、早口でしゃべった。いくつかの大切なことばが届いた記憶があるが、それ以外大半の時間はことばを発しないことをよしとして押し黙るか、同意のための笑いに私の表現は回収されていった。

それからいろいろな経緯があり、大学院という場所に行き、5年間を過ごす間に、中身の詰まった、たくさんのことばを知るようになった。私はことばを発することに全力をかけて、他者から同じように発せられることばを聞き逃すまいと必死になった。

毎日の生活や仕事をともにしているわけではないのに、私にことばをかけてくる人たちがいる。時に戸惑い、自分を問われている気持ちになることばを聞かされると何も言えない自分が悔しく思えた。ある人は社会について怒り、それにつながる私の振る舞いについて、立ち止まって考えろと怒っている。ある人が語ることばには無駄なものがちっとも含まれていない。その語り口から淡々と人と共に生きてきた積み重ねがにじみ出てくる。ある人のことばはユーモアで丸ごと辛いことも包んでしまうから、細々とした悩みや不安が満ちた世界があることを忘れてしまう。ある人は難しいことは一つも言わないが、ほんとうのこと、しか言わない。こうしたことばがぼんと耳に飛び込んでくると、だらしとしていた私はハッと襟を正す気持ちになった。彼らは社会的には周縁にいて、そのような立場にいる人たちと生きることを続けてきた人々である。

そうした人々と出会うのと並行して、私がことばに意識を向ける場所があった。ことばを交

わすことを学びなおしたのは、対話の実践の場だ。研究室の人たちと高校に授業に行くと、ひとりひとりが、何かを思いついたら順番を回してもらい、おしゃべりに参加する不思議な話し方をしていた。研究室の人たちはそれを「てつがく」や「対話」と呼んで、そうした時間と場所を作ることを大切にしていた。

対話では一人一人に話す機会があり、みんなで話している人に耳を傾け、相手を論駁するのではなく、他者と自分との考えの違いを見極めていくような作業をしていく、らしい。わからないと思っていたこと、考えようとも思っていなかったことを、問いの形にして、その問いが他者にも伝わるように吟味し、一緒にことばを変換していく作業が必要、なのだそう。対話の場の構成や、質問の投げ方を学び、対話とは探究のコミュニティを作る、書物の上ではなく現場で哲学をすることなのだ・・・といった目的を頭では理解しながらも、私自身は2年3年経っても、行われる「対話」がなんなのかうまくつかむことができなかった。それでも、授業で半年ほど対話の場を共有していた人たちと再会すると、その時の互いの立ち位置に立ち返って話題を繰り返すようなことがあった。それから、年月が経っても忘れられない、その場で聞いたフレーズがあった。ある人はアートと社会の関係を考えるような対話の場で、アンリシャルパンティエの菓子工場で個別包装をし続けたことを必死に語っていた。何時間も一人で同じ場所で作業をして、出来上がるビニールに包まれた菓子をみる。その場で語らざるを得なかったその人のことばとその体験はどういうことなのか、もう6年も前のことだが、私は時折回想する。

そうしたいくつものことばの記憶を溜めていきながら、私はその場に癒されてもいた。私がよく知っている、私を押し込める型としてのことばをペラペラと喋ってしまいそうになるのを溜めながら、一言一言が私にとっての真実であるかを確かめ、話すことが、場さえあれば何度でも試すことができたのだ。伝わらなかったら、怒られたり無視されたりするのではなく、聞き返してもらえた。ことばを聞き、発するときの丁寧な態度が、私自身を変えていく、そうしたことばの面白さに出会うことができたのだ。「わたしたちが、話すことを通して、自身を他者に対して示し、私たちが身体、感情、知的理解の三つの意味で脆い存在であることを認めあうことによって、対話はじぶんたちの変容と解放そしてケアの場となる」。5年も対話に参加し続けることでようやく、対話の実践について書かれたことばが意味あるものとして私に落ちてきた。

また別の文脈で、ことばと出会う場所があった。美術館や劇場でなく、地域の寄り合いや野外や施設の中で行われるアートの実践の場である。私はそこで人々と穏やかにことばのやり取りを楽しんだわけではない。初めて高齢者福祉施設を訪れたときには、私が生きている世界とは異なる雰囲気や匂いに酔ったようなむかつきを感じてぼんやりした。それに対し

てアーティストとして活動する人たちは、そこにいる一人一人と話し、全身で泣いたり笑ったりしながらことばを返している。そこで聞こえてくることばは、アーティストからであれ、その場にいる人からのものであれ、切実な表現として響いてきた。アーティストはその時に起こったこと、自身が見たこと、交わしたことばのことをずっと考えているようだった。彼らは自らの技術を使って作品を作っていくが、作品の中でそれまでに交したことばが言及されたり、作品の上演や展示がことばを交した時空間への応答になったりしていた。私にはそれが不思議で、アーティストやその場にいる人々が交したことばと彼らの振る舞いをメモして、帰ってからひたすら文字に記録していく、そういうリサーチを始めた。

リサーチを進めるのとは別に、何度もアートの実践の場に行くことで少しずつ気づくことがあった。アーティストらと役割が違う「リサーチ」「記録」をしているからといって、ぼんやりして相手の出方を観察しているのは、卑怯な振る舞いなのではないか。外から訪ねて来たのはこちらなのに。信頼関係をまだ結んでいない相手に、こちらの立場や目的なんかは置いておいて、まず相手のことばを聞き取るために疑問をいつでも投げられる口構えを取っておきたいと思うようになったのは、比較的最近のことである。

そういう口構えを試みるようになって、聞こえてくることばもある。地域や施設といった場所に日常的にいる人たちと私のような外から訪ねてきた人とが集える場所をアーティストらは工夫を凝らして、発案する。そこでは強制されることなく、一緒に作業したいと思える何かが用意されている。ぽつぽつと各自が行える縫い物の作業や火をおこす作業などがあるときに、参加する人たちは目的を理解したり、気負ったりせず一つの場を共有する。そこでは、一つまた一つとその場に人々が落とすことばが聞こえてくる。各々のことばは、明確な連関や流れなしに、ぽとりぽとりと場に落とされて、中身を伴っている。最近では体が痛い、という人に、寒くなってきたと言う人がいる。回覧板に回ってくるような、ご近所の情報が伝達される。縫い方のコツ。火をおこすのが当たり前だった幼い頃の記憶。最近思いついたこと。集った場所がそうしたことばで充実してくると、私の体は内側から温かくなる。

現在ことばが交わされる場は危機的な状況にあるように思うから、ことばについて考えるのかもしれない。感染症の流行を食い止めるために、圧倒的な力を持って発せられる国からのことばに、私たちは生活の一々、一挙手一投足は縛られている。それにもかかわらず、ウィルスやそこに密接に関わる社会や経済によって、死に追いやられる人々は増え続けている。力を持っているがゆえに多くの人に届けられることばが問題を曖昧にし、思考停止を促す説得であるときに、短縮され誤用された英語に変換されたことばであるときに、それが繰り返され SNS やネットの記事で再生産されるときに、わたしがこれまで積み重ねてきたことばへの信頼は掘り崩されていく。

一人で家にこもるしかない日々の、青白く光るスクリーンを前にして、人が喋っている顔を正面から見続ける、そんな会議を何時間もやる。私は相手の髪の毛の先とか、後ろに写っている家具の配置とかを見てしまうから、自分の何を見られているのだろうと思うと恐ろしくなる。その日の夢では、光るスクリーンの中で喋る人たちはバラバラに割れて、砕けた鏡になり、私の部屋の様子を写している。今という状況を生きることは、常に吐き気を一方で自覚しながら、無理やり栄養を取るために食物を口に入れるようなもので、日々の生活に介入してくる力に圧倒されずに、何とかこれまで生きてきた方法で生き延びようとする。

現状に翻弄されても、聞こえてくることばの違い、それらのことばが発せられる場の違いにきちんと意識を向ける必要があるのだろう。聞きたいと引き込まれていった、そして同様に語りたと思うようになったある種のことばがあるのだから。ことばを聞き取り、語る術を探ろうと私は毎日考える。人に会えないのであれば、さまざまなテキストを集めよう。生きる術を探す私には、学問としての分野とか語り手の立場の違いとかはあまり重要ではなくなってしまう。

例えば、2020年の初春にイタリアで調査をしてから追いかけているフランコ・バザーリア。精神医療を改革し、精神病院を廃止する法律を策定させるよう働きかけた彼は、「抑圧と暴力が依然として私たちの現実の明らかな主題である限り、物事がどのような状況にあるのかを、うわべの新しい理論の構築下で覆い隠さないためには、私たちは現実に起きている現象そのままの明白な言葉を使うことである」と記したという。

1978年に法制定がなされ、精神障害を持つ患者が地域で暮らし、雇用され、協同的に生きる精神保健サービスの仕組みを持つ今日のイタリアでも、患者を排除しない地域社会を作ることは苦闘の連続であるようだ。精神医療改革に奮闘し、拘束廃止運動にも携わるジョバンナ・デル・ジューディチェは、バザーリアの先のことばの実践を参照して、ケアの前提とすることと、拘束の実践のパラダイムが相容れないことを指摘する。社会や関係性の文脈に埋め込まれることで、精神的肉体的苦しみを負う人の苦しみを軽減し、その表明の方法や形態を変容させて、病気を豊かな経験に変えていくことがケアであると彼女は言う。現実を覆い隠さず、倫理的に正しく、「明白な言葉」で実態について話すときには、高齢者施設や病院や依存症の治療共同体といった「ケアの場」で行われている器具による拘束は、「縛る、巻く、固定する、抑止する」「柵付きのベッドで人を固定するか、帯、コルセット、皮ひもを使用してベッドに縛り、上肢と下肢を固定させる」といった表現になる。

現実についてのことばを話すという自覚は、私たちがうわべの新しい理論、言い換えれば誰かがすでに語っていることばをそのまま借りることで、可能にしてしまっている暴力を

あぶりだす。

それから、ウェブマガジンで出会ったアーティストの梅田哲也。彼は日用品や廃棄物なども使いながら、建物の機構や周囲の環境構造や組織のルールを組み替えることで、現実の世界の文脈をずらし、ものの捉え方を多様化する展示作品やパフォーマンスを行ってきた作家だという。「いろんなことが“言葉”の後追い」になっていて、説明できないこと、豊かに充実している時間が見過ごされ、答えを求める雰囲気アートの中にも生まれていると彼はインタビューに答える。

その状況への彼なりの応答の一つに「歌」をテーマとした作品があるようだ。パフォーマンスや儀礼として披露されるのを目的とするのではなく、「風呂のなかで気分がよくてうたうとか、悲しいときにうたうとか、感情が漏れ出たようなもの」が、そもそもの「歌」である。声と身体で立てることのできる音だけで、いくつかの集団ごとの合唱が重ねられ、中心を持たずに表現が生み出されるパフォーマンス作品『Composite』は、そうした「歌」を歌えてしまういくつかの仕組みをワークショップの参加者と共有して作られた。「ちょっと声を出してみようか」と誰かに言われて、素直に歌いたいと思う子なんてほとんどいない。でも、圧力みたいなものを取り払って、まずちゃんと環境をつくってしまえば、本当はみんな歌えるんだよね。だって、歌はみんなのものなんだから。下手だから歌いたくないっていうことにはならない。」と梅田は言う。

彼の歌の解釈は、表現というものが、誰かに向けられて行われるだけではないことを気づかせてくれる。他者からの、他者へ向けたことばよりも、意味を持たず私から漏れ出てくることばに注意を払うこともできる。ことばが私から自然に漏れ出る環境を整え、その仕組みを持っておくこと。それは私にとっては誰もいない道路で歩きながら声が出るのに任せ歌うことであったり、ぼたん鍋を食べた次の日、仕事に行く前に「猪になるあさ」という詩を書くことであったりする。一人でことばを表現したあとには、誰かに向けて話すことばは少し緩んで、ゆったりとする。

自分なりのことばが生まれるのを感じ、そうしたことばを誰かに向けて語る。中身の詰まったことばを聞き、そのことばを話す人を感じる。誰が言い始めたのかよくわからない、ことばで頭に溢れてきたら、それらのことばによって覆い隠されていることを見極める。私の信じることばについて考えながら、さまざまな文章を読み、また語り始めよう。ことばへの信頼を失わない仕組みをそうやって地道に動かし、増やし、共有する。こうして書くこともまたその方法の一つなのだと思う。

## 参考文献

- ジョバンナ・デル・ジューディチェ (2020) 岡村正幸監訳・小村絹枝訳『いますぐ彼を解きなさい——イタリアにおける非拘束社会への試み——』 pp.67-79, ミネルヴァ書房.
- 高嶋 慈 (2019) 「梅田哲也『Composite』」『artscape』, [https://artscape.jp/report/review/10156988\\_1735.html](https://artscape.jp/report/review/10156988_1735.html) (2020.12.28 最終閲覧)。
- 永江大+鈴木瑠理子 (2020) 「INTERVIEW: 梅田哲也 ただそこにある小さな声と時間を感じる」『paperC』, [https://paperc.info/on-site/2007\\_tetsuya-umeda](https://paperc.info/on-site/2007_tetsuya-umeda), (2020.12.28 最終閲覧)。
- ほんまなほ (2018) 「フィロ、ソファ、イエス！」高橋綾・ほんまなほ著, 鷺田清一監修『こどものてつがく ケアと幸せのための対話』 pp.289-324, 大阪大学出版会。